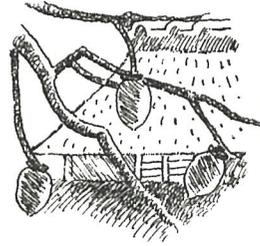


随

想



### 一般演習のこと

西條隆雄

先日たんすの奥をひっかきまわしている  
と、丁寧と和紙にくるんだ色紙様のものが  
目に写った。一体何だろうと思って開けて

みると、かつて国立博物館で陳列された平家納経の表紙の複写が三枚入っていた。昭和四十七年と記していた。そのうちの一枚は宗達の描いたものであった。

宗達の名前はどこかで聞いてはいたが、彼との出会いは平家納経をみた時が最初だった。そしてその時限りで彼の名前は私の記憶から消え去ろうとしていた。しかし最近になって宗達の画集が出るに及んで、再び彼に対する興味が燃え上がってきた。生年没年共にわからず、わずかに、画家が自己の様式を確立する頃を三十歳代、そして世の評価を得るのを四十歳頃と推定し、平家納経の修理に登場する宗達を四十歳頃とするほか、確たる事実はないらしい。金銀泥、緑青、大らかな空間、荘重でしかも繊細で情趣豊かな彼の作品をみるにつけ、宗達とはどのような人間だったのだろうか、としきりに考えてみるのである。

丁度その頃、私は辻邦生の『嵯峨野明月記』をよんだ。これは、光悦、宗達、素庵の三人が各々の特質をもち合って華麗なる嵯峨本を作るに至る過程を描いたものである。しかし、内実は伝記のほとんど皆無に

等しい宗達、光悦（二百五十通の書簡と佐野稲益の手になる「にぎはひ草」があるくらいなもの）、それに素庵の生いたちをつづり、生命の充足（宗達）、清浄な品位の世界（光悦）、生の矛盾（素庵）をみごとに描き出した作品として、すこぶる興味をかきたてるのである。

宗達に関する部分では、彼に特徴的な金銀泥と緑青は、幼い日の「棄丸」という猫の目に由来し、その金と銀の輝きをみていると、彼はえもいわれぬ喜びに満たされる。家が唐織を専門とし、上品な顧客をかかえているのに、彼は毛虫をつぶした時の濃い緑の汁にいい知れぬ快感を覚え、次々と毛虫を殺している。大胆な仮定とはいえ、幼年期に一種本能的に魅された色彩に、生涯の決定的要因を求めている点は面白い。だが、このような気儘な餓鬼の気儘さが辛いし、しかも与三次郎の指導助言が手伝って、彼は独自の画境を開いてゆく。彼の筆は写実を離れ、「心のなかにしみこまぬ形など何の役にも立たぬ」ことを知り、画家の心の震え、画家独自の個性の描出に精神を傾ける。平家納経の補修依頼がやってくるのは、宗達がそのような悟りを

得た時であった。その納経は、宗達を完全に魅了し、彼に「心の一段と深い底からなにかを汲みつくしてゆくような感じ」を与えた。そして、その濃厚な上代情緒を描こうとして迂余曲折を経た結果、「華麗でいて枯淡な世界」、すなわち上代絵師の装飾ではなく、彼自身の装飾画をかかねばならぬことにたどりつく。宗達補修の一部、すなわち、あの山の端にのぼる暁の太陽の絵は、このような境地から生まれた。この部分を描く作家の筆には、宗達の心の震えと息づかいをさえ伝えているようである。かくして彼は、今までとはちがった激しい燃焼と没入の中で、「これこそが絵をかくことだ」ということを知り、はじめて「自分の何であるか」を知るに至る。

この生命の充実、燃焼を通して己れを知ること、そして宗達画の豊饒な世界に魅せられ、私は臆面もなくこの作品を一般演習のテキストに使ってみた。結果的には、光悦に五名、宗達に八名、素庵に三名の共感者が各々ペーパーを提出したが、そのいずれもが、まるで自分の心に語りかけるような文体で、各々の人物をとらえたことは、

実に興味のあることであった。

(大学商学部助教・英語)

## 問題かかえる

### オリンピック

田 淵 和 彦

モントリオール・オリンピック大会は、七月十七日から八月一日まで、十六日間わたって開催され、世界九十四カ国(エントリ―は二九カ国)から約九千人の競技者が参加、各競技場で熱戦が展開された。わが国からは、総勢二六八人の役員選手が派遣されたが、この中に、わが同志社からも六種目の競技に、六人のOB、現役が代表として加わったことは、同志社百年の年輪に実った<sup>かど</sup>素晴らしいスポーツの果実として同慶にたえない。

一八九六年、フランスのクーベルタンによって復興された近代オリンピックは、四

年目に一度開催されて、今年で第二十一回の歴史をかさね、世界の若人の夢となり、世界最高最大の国際競技となった。しかし、近年複雑化する国際情勢はスポーツの世界にまで介入し、ローマ大会のころから大会ごとにいろいろの問題が、この大会の持つ世界性と純粋性をゆがめつつあることは周知の通りである。

オリンピック憲章は、その第一章に、「オリンピック競技大会は四年ごとに開催する。大会はすべての国のアマチュアを公正かつ平等な競技会に参集させる。大会においてはいかなる国家または個人に対しても人種、宗教または政治上の理由から差別待遇することは許されない」としている。

あるいはまた、「オリンピック運動の目的はアマチュア・スポーツの基調をなす肉体的努力と道德的資質とを若人の中に振りおこさせ、あわせて四年ごとに行なわれる利害関係ぬきの友好的な競技会に世界の競技者を参集させることによって人類の平和の維持と愛に貢献することにある」また、「……大会は個人の中の競技であって国家の中の競技でない」

これは憲章基本綱領の一部抜粋にすぎないが、今、オリンピック運営に暗い影を投じ、論議の的となつてゐる諸問題を考へるとき、国名の問題、人種差別の問題、アマチュア問題など、すべて前述の憲章に盛りこまれてゐるはずである。

さらにミュンヘン大会のアラブゲリラ事件にまでエスカレートしたため、今回は空前の厳戒警備体制下に、選手役員一同は、犬の首輪につけた鑑札よろしくIDカードをぶらさげて行動する有様で、選手の二倍におよぶ自動小銃を手にした警察官、軍隊までを動員して警備に努力したカナダ当局の配慮は、選手の安全を守るためとはいえ、大会運営に、プラス経済的にも、精神的にも非常な負担であり、こうまでしてオリンピックをやらねばならないかとさえ思われた。

以上は、モントリオール報告としては多少的はずれかとも思うが、入場式、選手村の設備、各国若人の交換風景、あるいは各競技場における緊迫したふん囲気などは、すでに新聞紙上等に報道されてゐるので、オリンピックの将来を左右する諸問題に皆

さん方にも関心を持つていただくため、この機会にあえて憲章まで持ち出してみた。

今回の日本選手団は、一部競技種目をのぞいて予想を下回る不成績として批判されている。しかし、オリンピックはあくまで限りなく向上する人間能力の可能性を追求する個人の努力の平和的発表の場であり、メダル至上や、メダル数による国家順位の優劣などは興味本位の非公式なものである。この点、日本国民として長い苦しい努力の結果、選ばれて代表となり、さらに、オリンピックにおいて日本記録をつくり、あるいはそれ以上の力を発揮しながらも、なお上位進出が果たせなかったことは、ただ世界の壁は厚かっただけでは片づけられない問題がここにも山積している。

一例をあげれば、今大会で注目すべきは、ソ連について東ドイツ、キューバなど共産圏国の台頭であり、これに反して伝統の優位をはこつたアメリカ、英国、フランス、イタリアなどの自由諸国の後退である。これは、生活をはじめ、社会的地位まで一切を保障されて練習に専心するステート・アマチュアと、組織や企業や学校など

の一般人に比べると恵まれた環境にあるとしても、一応アマチュア規程の枠内にある競技者との練習量とその真剣味の差であることも挙げられる。

オリンピック・ムーブメントは、今一つの曲がり角に來ている。創始者クーベルタンの求めた理想を追求してこそ、世界各国の親善と理解とそして永遠の平和に貢献することが予想できるのである。オリンピックに国家主義が入ることは、競技場を醜い政争の場と化し、やがては選手のプロ化とつながつて、古代オリンピック廃滅の轍をふむことになる。最高機関IOCをはじめとして、各種目国際競技団体は、早急に検討し、解決しなければならぬ大きな課題をかかえている。

オリンピックは、すでにモスクワに前進をはじめている。

大学工学部助教

ローマオリンピック大会選手

東京オリンピック大会選手

ミュンヘンオリンピック大会コーチ

モントリオールオリンピック大会監督

## 私と錦鯉

久保 誠 三

私と錦鯉との出会いは十年余り前だが、錦鯉の良否が多少なりともわかりかけてからは、まだ五、六年であろうか。

錦鯉を飼うというのは贅沢な趣味のように思われ勝ちだが、私のはそんなのではない。現在三十匹余りいるが、ほとんどは、小さな安い鯉が育ったのである。それでも、初めて訪ねて来た人には素晴らしいものに見えるようである。大抵の人は、まず、「ほう、立派な金いろの鯉がいますねえー。」と黄金鯉に驚かれる。私どもは、子供の時に、金いろの魚を釣った漁師の童話を讀んだ覚えがあるので、そのイメージが感嘆の声となるのであろうか。その黄金鯉は六十種余りになっているが、十種ぐらいの時に、たしか千円程で買ったもので、錦鯉としてはそうおもしろい鯉ではない。

錦鯉には赤白、三色、ベっ甲、秋翠等いろいろな種類があるが、私が一番好きな鯉は赤白である。純白の地に赤の模様、上品に、しかもバランス良く、迫力をもって染めつけられていると、誠に魅力を感じる。又、男性的な力を感じる昭和三色というのも、私の好きな鯉である。

私には愛鯉家の仲間が沢山いる。以前は、よく誘われると、遠く新潟から広島まで鯉を探しに行ったものである。その頃は、まだあまり錦鯉が普及していなくて、小さいものであれば随分良い鯉でも安く手に入った。だが、私の鑑賞眼も未熟で、ヘマをしたり、気に入ったのが見つからずに、旅費の方が高価に付いたということが多かった。それでも私は満足であった。私は、鯉を探しに行くというよりも、いろいろな職業の鯉仲間とつきあうことの方が楽しかったのである。鯉仲間にはたまにしか逢わないが、何十年も毎日顔を合わせている職場の仲間と同じぐらい、親近感をいだいている。長年教師をしていると、どうも世間知らずのお山の大将になりやすいもの

だと、自らを反省するのだが、鯉仲間ができてから、少しは世間に目を開かせてもらったような気がする。感謝をしなければならぬと思っている。これだけでも、鯉を飼ったことは私にとって誠に有意義だったのである。

ところで、昨年から急に校務が忙がしくなって、鯉仲間とのつきあいが疎遠になってしまった。又、落選するような鯉でも品評会に出して、仲間と気楽な一日を過ごす楽しみも当分お預けとなった。鯉の世話も家内任せになり、池の掃除も長くやっていない。けれども、鯉たちは至極元気で、玄関を開けるなり忽ちさつと寄ってくる。鯉たちは喧嘩をしないし、列をなして優雅に泳ぎ、暗くなると寄りあつて眠る。誠に平和な姿で心をなごませてくれるのである。

つい先頃、鯉仲間の間で鯉の病気が流行して、惜しい鯉を随分沢山死なせてしまったようである。新しく買入れた鯉が、池に病気を持ち込んだのである。私は忙がしくて、この一、二年新しい鯉を買っていないので、被害をまぬがれた。何が幸いするかわからない。

(中学校長)